
あたしの座る場所

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの座る場所

【Nコード】

N0712P

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

「フツ」の恋ってヤツ」からスピンアウトしました。それよりも何年か後の、同じ会社でのお話です。登場人物は、一緒です。

あたしと彼は長いこと「そういう関係」で、誰もそれを知らない。進展もなければ、後退もない。そこまで深いオツキアイでもないしね。だけど、なんだかちょっと微妙な感じ・・・「デキる男」は何考えてるのかわかんないし、そんなヤツに気を許すのも癪に障るし。長い春なのか情性なのか、何も考えずに続いてきた二人のラブスト

ー
リ
イ
で
す。

「そういう関係」 1（前書き）

「フツの恋ってヤツ」のサブキャラクターたちが主役になります。
5年後の社内をご覧いただければ、幸い。

「そういう関係」 1

「はい、エア・トラッド・ジャパンの野口でございます」

―あ、おたくの部長ね、なんて言ったっけ？

「部長は何人かおりますけれど、どのようなご用件でしょうか？承りますか」

―じゃ、いいや。

がちゃん。

また、モノ売るか。

バカ正直に部長の名前を答えて後で説教されることなんか、何年も前に卒業した。

津田君と沢城はド派手な純愛騒ぎの末（本人たちはそう思っていないし、ヘタしたら誰も知らないと思ってる）に、何事もなかったかのように結婚して、気がついたら子供までいた。

ウエディングドレスを七五三と評されて膨れた沢城が、ママだっていうのは俄かには信じ難い。

津田君のPCの壁紙はデカデカと子供の写真で、聞いてもいないのに寝返りうったのつかまり立ちしたのって言う。

相変わらず、子供みたいなヤツだ。

顔そのものが報告書だから、その日の実績は日報を見るよりも本人を見た方が早い。

沢城、楽だろうなあ。

「野口、分岐管と吹出口、チェックしといて」

開発営業部の島の向かい側から声がかかると同時に社内メールが送られてきた。

図面が添付されてるだけかと思ったら、ひとこと。

―来る？

いや、いいんだけどね。

改めて誘ってもらおうとは思ってないし。

目をあげたら、知らんぷりしてマウス動かしてる綺麗な顔。

新人社員たちの「憧れのお兄さん」は健在。

でも、あたしたちのことは誰も知らない。

あんなにくつついて歩いてる津田君でさえ。

はじめて「そういう関係」になったのは、ずいぶん古い。

入社2年目だったと思う。

見栄えが良くて仕事ができる彼にあたしはすぐに有頂天になったけど、気がつくのも早かった。

彼は本心を見せない。

さわやかで後輩の面倒見良く、ノリも良く、上司の覚えも目出度いけれど、自分を見せたがらない人。

そんなの、こっただけ気を許したりできない。

そんなこんなで何年も別れたりくつついたりを繰り返して、あたしも三十路に入るところ。

楽しく付き合う相手としては、申し分ない。

ベッドの中のことも上手だし、話題も豊富。

山口肇っていうのは、あたし、つまり野口亜佑美にとってそんな存在なのだ。

「そういう関係」2

彼はあたしを「野口」と呼ぶ。

会社でもベッドの中でも同じく「野口」だ。

はじめの頃は名前で呼んで欲しくて、とても不満だった。

今では「ああ、こうやってボ口を出さないようにするわけね」と納得するのみだけど。

頭がお留守になってる時に、うっかりプライベートの名で呼んでしまったら、そこでバレちゃう。

バレるのは構わないんだけど、別れた時の詮索がうるさい。

ましてお互い結構イイ歳になっちゃってる今、結婚はまだかとか言われそうな気がする。

部長なんて「両方とも相手が見つからないんなら、そこで手を打つとけ」とか言うし。

・・・手を打ったワケじゃないけど、相手は今直接顔を見較べた張本人です、部長。

そんな時山口君は、あたしの肩に手をまわして顔色ひとつ変えずに言う。

「部長のオススメもあるし、野口と結婚しちゃおうかな」

大抵は酒の席の話で、あたしも山口君に寄りかかって「そうしちゃおうか」なんて言う。

アホクサ。

あたしは自宅通いだけど、彼の小さいマンションに住みつきたいと思ったことはない。

もっと若い頃は、掃除してみたり料理してみたりすることはあった・
・気がする。忘れた。

慣れた仕事に大失敗なんてないし、たとえば実家を追い出されても、食いつめるほど所得は低くない。

一緒に遊ぶ友達もいるし、趣味のフラワーアレンジメントのサークルの行事もあって、プライベートも悪くない。

そして、気楽につきあうには十分な男がいる。

ぬるま湯状態が長いこと続いていて、自分のブラッシュアップにはならなくても、えいやつとそこから抜ける気にはならない。

山口君とは、このまま微妙に続いて行く気もするし、明日は別れちゃうかも知れない。

怖いことに「山口君と別れた後」を想像しても、現在の生活は変わらない。

一週間に一度くらいの割で訪れている彼の部屋に行かなくなるだけ。そして、その想像に痛みを伴わないほど、あたしは生活に麻痺しているのだ。

山口君がどう思ってるのかは、知らない。

彼があたしに向ける顔は「さわやかで人当たりのいい好青年」ではないから。

生の感情に触れたことのない違和感に焦りを感じるほど、強い感情は通り過ぎた。

今の距離でいい。

「鶴が機を織ってる」 1

設備施工部に派遣の女の子が入ったのは最近だ。

不況の折、中途採用を減らして派遣に移行するって会社の方針には賛成できかねるものがあるけど、あたし他のペーパーがそんなこと言っただって、どうしようもない。

で、この子は三枝麻衣っていうんだけど、テンポが誰かに似てると思ったら沢城だった。

もつとも、沢城みたいに「守ってやりたくなるような外観に鋼鉄の芯」じゃなくて、なんか陸上競技でも現役でやってるんじゃないかって感じの、細い身体に筋肉の乗った色気のないスレンダー。

打ち合わせのスピードなんて速いのなんの、こっちが施工管理台帳見てる間にPCに商品の型式打ち込んでる感じ。

設備業界はじめてだっていうけど、勘がいいんだな。

パンツに包まれた足は多分すごく綺麗だろうと思うんだけど、女の子オーラをふりまいてない彼女に目を留める男はいない。

いた。

山口肇、その人。

一瞬の表情の変化が何を意味しているのか、はじめは理解できなかった。

彼はすぐに普段の「憧れのお兄さん」に戻ってしまうし、視線すらコントロールできるらしい。

気がついたのは、あたしだけ。

もしかしたら本人も気がついてないのかも知れない。

まだ慣れていない彼女は、メーカー名も知らない部材のカタログを

見ながら知識を丸呑みしようとしていて、質問しやすそうな人は誰彼問わずに「これは何に使うものだ」やら「換気と排気は違うのか」やら聞いてくる。

仕事熱心なのは結構なんだけど、女の子の間でそれはやっぱり浮いてしまう。

まんま、沢城。

彼女は面倒がらずに教える山口君と津田君にせつせと質問をぶつけるようになった。

自分の部署で聞けよって話もあるけど、設備施工部は現場仕事メインのオジサンたちで昼間はいないことの方が多いのだ。

津田君は純粹に「女の子に教えてやれる」のが嬉しくて仕方ないらしい。お子様だから。

山口君は普段からの面倒見の良い顔を崩さないのだけれど、ちょっとした違和感。

本当に一瞬だけね。

「今、いいですか？」

そう彼女が声をかけると、戸惑ったような顔になるのだ。

つまり、それに気がつくほどあたしは彼の表情に気をつけてたってことか。

意外なことに、あたしに「嫉妬」は訪れなかった。

そのかわりに湧き上がった感情は。

——見ちゃった、鶴の機織り。

「鶴が機を織ってる」2

気がついちゃったからって何も変わらない。

あたしから山口君にその話題を振る気はないし、山口君は三枝さんに対してアクションを起こさない。

三枝さんはまったく気がついてない。っていうか、気がつく筈がない。

鶴が機を織っている現場がここなのだと気がつくと、連鎖で見えてくるものがある。

機を織るために必要な材料の揃え方とか、織り上げた反物をいかに高価に売ろうとしてるかとか。

すっごいプライドとストイックさ。

他に活用すれば、こんな中規模企業になんていなくて良かったかもね。

他人をコントロールできると考えている傲慢さまで見えてきちゃう。

あたし、今まで彼の何を見てたんだろう。

彼は「自分が他人を観察する程、他人は自分を観察してない」と思ってる。

確かに、細心の注意を払って煙幕は張っているんだろう。

ただど一度繋がったシナプスは、広がることはあっても容易には切れない。

山口君の三枝さんに対するあるかなきかの反応を、あたしは注意深く見守る。

その感覚は、たとえば赤ん坊が寝返りをうつ場面をじっと見ている行為に近いかも知れない。

手を出してはいけないけれど、目がそれを追ってしまう。

彼は赤ん坊のように愛らしくはないけれども。

彼が動き出したら、あたしはどう思っのか。

あっさりと「じゃあね」と言ってしまっそんな気もするし、泣くかも知れない。

ただ彼の素顔がちらつと覗く瞬間を捉えた時に、あたしの感情は少しだけ色をつける。

痛みではなく喜びに近い色合いについては、自分で自分の理解の範囲を超えている。

時々社内メールの短いやりとりで帰り時間の確認をし、電車を一本ずらして帰るだけ。

時々休日に待ち合わせて街をウロウロと散歩して、内容のない会話をするだけ。

それはそれで楽しい時間だし、今すぐにケリをつけたいわけじゃない。

山口君がどう思っているのかは、やはりわからない。

「鶴が機を織ってる」3

いわゆる「若手だけの飲み会」に三枝さんを連れてきたのは、津田君だった。

仲良しグループに入りきらない人は誘いが行かないことが多くて、それに気がついて拾うのは、大抵の場合山口君なのだけれど、三枝さんにはそれをしなかった。

気がつかなかったんじゃない、そんな間抜けじゃない。どうした、山口肇。

あたしにはバレバレの意識の仕方に、他の人が気がつかない不思議。いつそのこと本人にツッコミを入れてしまいたい衝動にかられる。

「気になるのなら誘ってみればいいじゃない」
「言わないけどね。」

若手社員って括りの中ではもう長老格になってしまっている山口君とあたしは、飲んでいる場所では調整役になってしまっていることが多い。息抜きの場所で息が抜けないことも多い。

正社員と派遣さんの間に微妙な溝をつける人もいるし（派遣さんと呼ばひ捨てていうのは難しい）その日のノリが合わなくて、ぽつねんと座っている子もいるから。

三枝さんは、思いの外浮いてなかった。

オンとオフの切り替えはできる子らしい。そして、大層お酒が強い。津田君が（いつものごとく）ケータイの子供の写真を見せるのにつきあっている。

山口君もいつも通り。

「山口さん、聞いてくださいよう」なんて甘えてくる人を男女共々

捌いてるし。

彼氏との惚気を垂れ流す後輩の相手をしながら、あたしも三枝さんに話を振る。

「三枝さんはいくつだっけ？彼氏、いるんでしょう？」

山口君の神経がこちらを向く気配を肩に感じた。

「26歳です。彼氏はね、大学の頃からの腐れ縁というか・・・まあ、いいじゃないですか」

「あ、いるんだ。三枝さんってそういう気配感じさせないから、フリーかと思った」

「私、色気ないですもんね。彼氏にもよく言われます」

あははっと笑う三枝さんに照れは見えなくて、女から見ると「さっぱりした子」に見える。

自分には寝る男がいるんだとはしやぎまわって吹聴する女より、よっぽど感じいい。

背中を向けている山口君は顔色ひとつ変えずに、いつものペースで飲んでいるだろう。

残念だったね。

安定した相手がいる女に手を出す程、山口君はリスクを計算しないで動くことはしない。

「鶴が機を織ってる」4

二次会に流れる途中に山口君はすつと隣に寄ってきて、ものすごくナチュラルな口調で言う。

「帰る？」

いつもならここで、何気ない顔してふたりで抜けるとい。

私も前を向いたまま笑顔で答える。

「やだ」

冗談じゃない、舐められたもんだ。

見縊られるにも程がある。

狙いをつけようかと思った女に相手がいるからって、すり替えようとしてると思えない。

ああ、今まで気がつかなかっただけで、そんなこと何回もあったのかもしれないね。

実は、あたしもあったけど。

だけど、今回は見えちゃってるんだもん。

手を出したとか口説いているのを見たとか、そんな問題じゃない。

あたしよりも三枝さんに目が行ってるのが見えてるんだもん。

そんな男とふたりで飲んだりベッドに入ったりして楽しいはずがない。

山口君が三枝さんに「興味を示した」だけなら、なんともない。

でも、誘うのをためらったり、彼氏いるの？なんて気軽に聞けないのは、結構マジに考えてたってことだ。

計算高い彼は、彼女をじっくり観察してから動き出そうとしていたに違いない。

仕事を進めるときと同じように。

その出鼻を挫かれちゃったからって、あたしに声をかけられたって三枝さんと何かあったとしても、それは仕方ないと思ったかかもしれない。

今までの何回かの別れの中で、お互いに別の相手を見つけたっていうことはあった。

それはそれ、流れの中でしょと思っていたんだけど。

自分の感情のすり替えに、あたしを使うな。

二次会に向かう集団から抜けていく山口君の姿を見送りながら、あたしは後輩と新しくできたエスニック料理店のランチのメニューについて検討していた。

「本当の声は？」 1

「今日は？」

本当にこれだけの社内メール。

「やめとく」

あたしの返事もこれだけ。

一週間のうち、2回目のお断り。

悪いけど、本当に気が乗らないの。

三枝さんは変わらず仕事熱心なので、設備施工部のオジサンたちにも慣れてきて、可愛がられている。

先日の「若手の飲み会」で打ち解けたらしく、女の子たちにも受け入れられつつあって、楽しそうだ。

彼女が「女の子」をアピールしないタイプなので、男の子と話し込んでいても、誰も気にしない。

誰もかどつかは、疑問だけど。

本当に気にしてない？

自分が気にしていないと勘違いしてるのと違う？

未消化の感情って、すぐには消えないでしょ？

あたしはとても意地悪く山口君を観察する。

綺麗な顔、如才ない営業報告、ちよっただけ人の悪い後輩へのちよっかい。

それはどれだけ自分を押さえつけて作り上げたキャラクターなの？
面白がりなのは知ってるけど、それも本当は「フリ」なんじゃないかと思う。

「あ、津田君、良かったらこれ沢城と来て。ずいぶん前に興味があるっぽいこと言ってたから」

フラワーアレンジメントのイベントの葉書。

「え？今はちよつと習えないんじゃないかな。でも出かけるだけで気晴らしになるか。子供連れてっていい？」

「習わなくても体験レッスンだけ参加できるよ。あたしがその間くらいは抱いてる」

「土日なら、俺がいるから大丈夫。瑞穂にもたまには気晴らしさせないと」

山口君が会話の中に入ってくる。

「お、ずいぶん夫婦者らしいオコトバ。仲いいねえ」

「野口、ちよつと見てくれる？」

指差したモニタの表計算ソフトの隅っこに打ち込まれた文字。

―何か機嫌悪い？

そのままキーボードを借りる。

―別に。気が乗らないだけ。

そしてenter。

その後津田君に沢城の近況聞いたりしてるなんて、あたしもタヌキっぷりが板についてきてる。

ああ、いやだ。

何の約束もないのだから、おしまいにするのは簡単にいつも通りに言えばいいのだ。

「しばらく、やめとこ」

今回に限って、それを言わないのは何故だろう。

「本当の声は？」 2

珍しく、山口君から電話が来た。

小娘じゃあるまいし、あたしは長電話は好きじゃないので（毎日生の声聞いてるしね）滅多に受話器越しの声は聞かない。

―俺、何か悪いことした？

ああ、この「受話器越し」って反則だわ。

声のトーンが落ち着いて聞こえちゃうし、しかも耳元。人様には言えない「どこか」での会話みたいじゃない。

悪いことされたわけじゃない、あたしが勝手に観察して勝手に気にしてるんだ。

彼が「他人に見せたくない」心の動きを見ようとして。弱みを握りたいわけでもないのに。

―山口君とは別件で、モノ思うところがあって。うん、本当に気が乗らないだけだって。ごめん。

すらすらと出てくる言葉で、あたしは何をしたいんだろう。

あたしの本音はあたしにも見えない。

このまま続けていこうって決意もないのに、別れる気もない。

―うん、何でもないの。大丈夫。

―それならいいけど。おやすみ。

とても優しく聞こえる言葉に、山口君の本当の声は入ってるんだろうか。

彼の誘いを断ったからと気にして電話してきたのだとしたら、あたしが何を考えているのか気にしているってことなんだろうか。

イベントに現れたのは、津田夫妻だけじゃなかった。山口君付き。フラワーアレンジメントなんかにつき合って、いたたまれない津田君が呼んだらしい。

どこまでもお子様なヤツ。

そういえば、山口君と沢城は微妙に仲良しだった。

津田君の子供は人見知りみたいで、沢城の胸にしがみついたまま顔を隠してる。

「身長が津田君で性格が沢城だといいねー」と言ったら、「ウチでその話した」と笑う。

ずいぶん柔らかい雰囲気になったな。

フリンしてた時は、なんか痛々しくて棘々しかったのに。

「慧太、^{きょう}暁くん抱っこしてて」

なんて普通の会話がまさに夫婦で、ほほえましい。

・・・と思っていたら、もう一人私と同じように思っている人、発見。

津田君に渡された子供の指握りながら、表情が「羨ましい」全開なんですけど。

相手が津田君な分だけ気を抜いてるんだろうけど、それはちょっとびっくりするような願望だね。

結婚なんて、したいと思えばいつでもできたらうに。

尤も、あたしは山口君と結婚したいと思ったことはなかったけど。

「本当の声は？」 3

イベント会場を片付けていたら、メール着信音。
山口君だった。

「会いたい」

疑問符と感嘆符が同時に頭の中にぐるぐるする。

なんていうか、会いたいつて言葉自体がはじめてかも知れない。
イヤでも毎日顔合わせてるし、誘いだって意思確認の言葉オンリー
なのに。

成り行きで始まって（確か、忘年会か新年会の後だった）変化もな
くつきあいつづけ、向こうに女の影が見えちゃ別れ、忙しくて時間
が取れなくなっちゃ切断し、あたしに他からの誘いがあっちゃ別れ
つてのを何年も繰り返し返していたのに、今まで見たことも聞いたこと
もない言葉だった。

考えられることは、ないこともない。

自分が持っていない幸せを見せつけられて、人恋しくなっちゃったん
だろう。

あたしはすでに結婚した友達も多いし、姉の子供は可愛い盛りの3
歳で、免疫がついてるけど。

そんな見当がついちやうメールなんて、絶対にらしくないじゃない。
それとも、今まで見当をつけなかったただだったんだろうか。

あたしはあたしで、彼の素の部分を見ようとしなかったのかも知れ
ない。

自分から見せないんだから、見なくても問題ないと思っていたかも。

でも、それって普通「見よう」って気をつけて見るものじゃないじゃない。

つきあいの中で発見していくものでしょう。

「遅くなるから、難しい」

とりあえず、メールを返しておく。

人恋しがってるんだろう、くらいの予測で義理と責任は放れない。

サークルは義務じゃなくて自主的な集まりの分だけ、自分の持ち分を疎かにしたらツケは自分に来る。

それを無視できるほど社会経験がないわけじゃない。

男との時間最優先、なんてせいぜい二十代前半までしか許されない。

片付けを終えてサークル仲間とお茶を飲みながら、明日はあたしから誘ってみようかなんて思う。

「本当の声は？」 4

「今日は？」

向かい側の席でメールってすごくヘンだと思ったのは、最初だけだった。

「うん」

やっぱりひとことだけの返事。

途中でちよつとだけ食べるものとお酒を買って、山口君の部屋に向かう。

ふたりきりになるたびにベッドに入るなんて時期は過ぎていて、飲みながら会社の噂話したりビデオ見たり。

彼は話上手だし、常にアンテナを高く掲げているので飽きることはない。

ただ「なんとなく不機嫌」も「すこし上機嫌」も「ひどく怒っている」も「バカみたいに嬉しがっている」も見たことはない。

常にニュートラルな部分だけを見せられている気がする。

だから、気を許していないのではないのかと思うのだけれど。

ちよつと突付いてみる気になったのは、昨夜の「会いたい」が残っているからだろうか。

「帰りに待ち合わせしよう」よりは、ずっとインパクトが強かった。

「三枝さんにカレがいて、残念だったね」

ちゃんと冗談に聞こえてるか、表情を伺いながら返事を待つ。

「なんで？」

勘違いだったかと思っちゃいそうな、何でもない表情。嘘つき。

「気にしてたじゃない、ずいぶん前から」

あ、今、失敗した。一瞬だけ表情にブランクが出る。ちゃんと見てるとわかるものだなあ。

「無理して返事しなくてもいいよ。別に、だからどうだって訳でもないし」

ますます意地悪。

これって「認めれば？」って言ってるようなものじゃない。

他の女の子を見てるのを悔しがるよりも、山口君の见えない顔が見たい。

あたしと今、時間を共有しているのはどんな男なの。

何年も経ってから今更な疑問であんまりだけど、間違った欲求じゃないでしょ？

見えなくても続いていたのか、見えないから続いていたのか。

「本当の声は？」 5

「なんでそう思った？」

「ん、なんとなく、雰囲気で。違った？」

ふむ、と考えた顔の山口君。

やり込めるつもりはないんだよ。怒っちゃいけないから。

「違う・・・って訳でもない訳でもないか」

正解はどっちなのよ。

ここで顔を寄せてキスなんかしちゃうのが、わかんないところ、その1だったりもするんだけど。

しかも口封じが目的ではないらしく、手はお行儀良いまま。話をする気はあるわけね。

「女とか男とか関係なくね、俺はあのタイプに弱いらしいよ。バカ正直に動くヤツ」

「津田君とか？」

「あれは極例。面白過ぎ」

「ないものねだり？」

あ、笑った。

「ないものってことはないでしょう。ちゃんと正直だし努力してますよ、俺は」

「・・・ご謙遜を」

平日の夜にあまり時間はなくて、帰る時間を気にしながらだ。

そうやって考えると「どっちでもいい」じゃなくて「ちゃんとそのために行動してる」になるんだな。

どうしてそうなるのか、考えたことなかった。

「つきあってる」から当然だと思ってて、それ以外の理由なんていないと思ってただけだ。

あたしも、何も考えてないじゃない。

駅まで送ってもらうのは、キマリゴトみたいになってる。

こういうところ、律儀だね。面倒だからってパスしたりしない。

暗い道で顔を見ないで話すのって、実は結構好き。

「昨日のメール、津田夫妻が羨ましかったんでしょ」

「うーん、まあ、アタリ。途中で暁君が寝ちゃってさ、それを津田が抱いてて、沢城が頼もしそうに見てるわけよ。アテられたね」

マトモに返事が戻ると思ってなかった。

また明日、と手を振って山口君と別れた後、次の機会に尋ねることを思いついた。

返事が戻ってくるかどうかは半々だけど。

——あたしと山口君って、どうしてつきあってるの？

笑って煙に巻かれそうな気もする。

「口惜しい」1

「山口さんってカノジョいないのかな。もてそうなのに結婚しないのって、女の好みがうるさいのかしら」

ランチの時の女の子同士の話題の中のひとつ。

「野口さん、そういう話ないんですか」

女の好みはうるさくないと思うよ。多分二十代で一番長くつきあってたの、あたしだから。

隙間はところどころあるけど、トータルすると何年になるかなあ。

・・・なんて、言わないけど。

なんせ見栄えは良いし人当たりも良い、仕事もできるとくれば、女の子だけじゃなくて男の子も懐いちゃう。

本人の「外用の顔」はそのままキャラクター設定になってて、それを常に要求されるんだろうな。

「他人にできることが俺にできない筈はない」ってプライドとか、求められる以上のものを先読みするために古い情報も新しい情報も常に整理して手元においてる勤勉さとか、そこは表からじゃ見えな
いし。

他人に厳しいことは言わないけど、自分が何をしているのかも見せないってイカガワシイ気もする。

生まれ持った外見と性格で、社会を軽々と渡っているように見えない・・・ように見える。

「頼りになる先輩」は水面下で一生懸命足を動かしてるんだよ。何年も一緒に仕事してるんだから、これくらいはなんとなくわかる。本格的に気がついたのがつい最近って、本当に何にも見てなかったんだなあ。

一緒にいて楽しく過ごすだけの興味しかなかった。

きっと感情も同じように、自分でニュートラルに入れることを強制してるんだろ。

人間関係を円滑にするために、それは必要なことなのかもしれないけど

刃なのか甘い菓子なのか、隠し持っているものを見せる相手が欲しくならないんだろ。

気がつくと、山口君は三枝さんにずいぶん普通に接するようになってきている。

前回、うまく話をすりかえられた気はするけど、やっぱりちょっと違うね。

女としての彼女に近づきたいのかどうかは判断できないけど、仕事相手としてはかなり買ってるな。

なんていうか、噛み応えのあるものの食感を楽しんでる感じ。それについてはなんとも言えないんだけど。

あたしが気になったのは三枝さんじゃなかった。

「山口さんの今抱えてる案件、揉めてるからな。昨日なんかずいぶん荒れてたし」

津田君のその言葉だった。

荒れる——津田君にはそれを見せたわけ？あたしはそんな山口君、知らない。

女の影をちらつかされて別れたときですら、抱かなかった感情を抱いた。

ひどい嫉妬だった。

「口惜しい」2

ああ、何がこんなに口惜しいんだろう。

知ってる。

何が口惜しいんだか、自分で理解してるんだ。

山口君の「生の感情」を見たことがある人がいる。

あたしが知らないものを、知っている人がいる。

「珍しいね、山口君が荒れるのなんて」

「うん、俺、はじめて見た。酒飲んで、カウンターにこう、がばーっと突っ伏してさ、やってらんねーよ、なんて」

抱えている案件にひどいトラブルがあるのは知ってた。

某大企業のシヨールームで、機械自体がすべて特注品の上、その仕様が搬入後に変更になって、現地で改造したりしている。

社外にも社内の工事部門や技術部門にもペコペコ頭下げて、それでも各部署からのクレームは担当者に集中する。

発注元の都合であるにもかかわらず、変更による経費はすべてこちら持ちで、物件としては大赤字。

涼しい顔して出社してるから、自分の中で消化できてるように見えてた。

「俺のせいでもないし、しょーがねーよなー」なんて言ってたし。

「愚痴くらい、言えればいいのに」

思わず口からこぼれてしまった。

あたしの顔には直接墨書きで「不満」と書かれていたかも知れない。能天気なお子様が、怯えた顔であたしの顔を見返すくらいには。

「野口さんには、心配させたくないんじゃない？他の部署との折衝で負担かけてるし」

「それがあたしの仕事じゃない。あたしが言ってるのはそんな意味じゃなくて」

・・・どういう意味？自分に突っ込んで、ストップをかける。

「女の人に弱つてるところなんて見せたくないでしょ。山口さんはああいう人だし」

ああ、津田君にまでフォローさせてしまった。

しかも、あたしの事情なんて知らないんだから、突然不機嫌なあたしに驚いたに違いない。

鼓動がおさまらないまま、外出中の山口君のデスクのPCにメールを入れる。

「今日、行く」

「行つていい？」じゃなくて、「行く」と言い切りの形に彼が驚けばいい。

「口惜しい」3

四時過ぎに帰社した山口君からの返事は「夕方から現場」だった。動揺した顔を見せなくて済んだと安心したの半分、口惜しい顔を見せたかったの半分で、あたしは黙って仕事を片付けていた。

「ちよつと野口と打ち合わせに籠ります。会議室に入りますから」ノートPCとファイルを抱えた山口君に促されて、会議室に入ったら悪戯っぽい顔。

「鍵、かけちゃおつか」

「・・・ヘンなことしたら、声出すわよ」

「出すじゃなくて、出ちゃうの間違いじゃない？」

現場打ち合わせの会話じゃないことは、確かだ。

鍵なんかかけないけど、会議テーブルに広げたファイルとパワーポイントの画面を映したPCは誰かが来た時の保険。隣に座った山口君の顔が近い。

「何か話したいことがあった？」

「こう聞かれたら、言えない。」

「何もない。大変なんですよ、現場。あたしよりもそっちに頭向けてていい。フォローはするから」

「そんな面白くなさそうな顔で言われてもね」

「山口君みたいにポーカーフェイスじゃないもん」

「ってことは、面白くないんじゃない」

こんなヤツに、あたしの表情を読まれるのは口惜しい。口惜しいけど嬉しい。

「土曜の夕方近くなら、時間が空く。その時なら話も聞けるから。泊まりで来る？」

「行かない」

「来てよ」

ここでキスは、狡いでしょう。すっごく誤魔化されてる気がする。

でも、そうか。

「なんだかおかしい」と気にしてご機嫌伺いする程度には、あたしの動向を気にしてるんだ。

少なくとも「どうでもいい人」にそんな気は使わないな。

「面倒見の良い先輩」の顔を、あたしに適用しているだけなのかも知れないけど、そこまで考えたらキリがない。

読みにくい彼を読む手掛かりは、案外とそんなところからなのかも。

「気に入ってるから」1

土曜日の夕方、電話を待つて待ち合わせした。

現場帰りの山口君は作業ジャンパーと紙袋にヘルメットで、その格好で外で飲みたくないと言い、会社のロゴを背負っていたらさすがに落ち着かないだろうと、結局一緒に帰ることにする。

「シャワーしたら、外に出る？」

「疲れてる人がそういうこと言わないの。簡単な支度でいいんなら、のんびりした方がいいでしょ？」

「食うものも飲むものも、何もない。冷蔵庫、カラ」

スーパーに寄って、お酒や食料品と一緒に籠に入れてたら、なんだか不思議な気分になった。

普段居酒屋ばかりだから、ちょっと野菜多めにしようかな、なんて普段なら彼の部屋で料理なんかしないのに。

明日も休みだからと思うと、仕事用の顔が抜けちゃってるんだな。

あたしは今、いい具合に自然だ。

山口君はどうなんだろう。

シャワーの音を聞きながら、山口君のスウェットを借りてお鍋の準備なんかする。

男のひとり暮らしに土鍋なんてないから、ステンレスの小さな鍋つて所はご愛敬。

ビールを飲みながら包丁を使っていたら、まだ髪が濡れたままの山口君が小さなキッチンに並んだ。

慣れないシチュエーションだな、調子が狂う。

「何作ってるの？」

「鶏団子」

「下準備できたら、ちょっと座ろう。まだ早いでしょ」

お鍋に出汁を張って、野菜を切り揃えたところでリビングスペース（3畳分くらい）でDVDを眺めてる山口君の隣に座った。

「俺のスウェット、ブルブルだから火なんか使うと危ないな」

そんなこと言いながら、背中から手が入ってるんですけど。

「何してるの」

「脱がそうと思って」

「素面でそれを言うか」

「酒飲むと寝ちゃうかも知れないし」

ふざけているうちにベッドに雪崩れ込む。

山口君の女の扱いは丁寧で、それはキャリアか性格か、多分両方なんでしょう。

あたしとのことも、キャリアのうちなんだろうか。

本当に疲れていたらしく、食事前に眠ってしまった山口君を起こさないように、リビングスペースに移動した。

シングルベッドにふたりで眠るのは窮屈だから、後で下に布団を敷かなくてはと思いながら雑誌をめくっているうちに、うとうとしたりしい。

気がついたらカウチの私に毛布がかかっていて、隣に山口君が座って寝ていた。

なんか、ヘン。

「気に入ってるから」2

何故横で寝てるんだろ、と不思議に思いながら毛布を半分分ける
と、もこともこと潜り込んできた。

ちよつと可愛いかも。

じっくり顔見ることなんて滅多にない。いい機会だから、観察しちゃ
お。

ちよつと甘めの優しい顔、輪郭の整った唇、男にしては細い髪。

口から出るのは少々毒気を含んだ軽いジョークと、後輩への的確な
指示、客先への澁みない営業トーク。

身長は平均以上、お腹は出てない。

女の子が社会に出てすぐに懂れるタイプだな。

顔をばーつと見ていたら、毛布の下で怪しい気配。

「何してるの」

「胸、触ろうと思って」

「許可しません。っていうか、寝てたんじゃないの？」

「顔じつと見てる人がいるから、起きた」

目を閉じたままの癖に、気配を読むイヤなヤツ。

「いや、ベッドで寝てたでしょう。いつの間に移動したの？」

「帰っちゃったかと思って、こっちに來たら寝てたから」

だから隣で寝てるっていうのが不思議なんだけど。

「もしかして、甘えてるの？」

答えは当然のようにナシ。

今まで何回か泊まったことはあるんだけど、いわゆる「相手と上手
く合わせられる状態」の時だけで

ひどく疲れていたり時間が慌ただしい時には「一緒にいても楽しく
ないから」と、パスしてたと思う。

今日だって、長引くトラブルの中で空いた時間なんて特例中の特例だ。

あたしが不機嫌な顔を見せたから？

荒れたなんて聞いた後だけど、仕事では抱えた荷物を放り出すわけに行かないだろうし、それで逃げる人でもないのは知ってる。

それに関しては、何年も一緒に仕事してるあたしだから、信頼してる。

行き詰って自分の感情の行方を見失う、なんてアリなんだろうか。それとも他に何かあるのか。

「ごはんにしよう」

毛布から抜け出して立ち上がったあたしの声は、多分動揺していた。

「気に入ってるから」3

食事しながら世間話をして、今の物件が片付いたら鎌倉まで紅葉を見に行こうかなんて言ってる。

お鍋をキッチンにもどして、軽く洗い物を済ませてから日本酒に切り替える。

帰らなくていいと思うと、よく飲むなあ。

山口君、眠そう。

「もう寝ようか？あたしも布団敷く」

「一緒に床で寝る。ベッドから布団降ろすから」

ちよつと待って！狭い！六畳足らずのスペースにベッドとチェストと本棚が詰め込まれてるのに。

大体、一緒に寝るって何？そんなこと、したことないじゃない。

ちよつと酔っている頭が混乱して、やけに慌ててしまった。

「あ、慌ててる」

ニヤつと笑った山口君はいつもの人が悪い顔で、からかわれたんだと思つたのに。

無理矢理布団を二枚並べて敷いて、これじゃ別々にする意味ないじゃないってスペースになる。

秋っていつてもまだ肩が冷える時期じゃないし、隣に誰かが密着してるのって慣れない。

「女の体温っていいな」

そう言う山口君の声は半分寝ている。

甘える時までわかりにくい人だ。

疲れただの逃げたいだのって言わない。

言ってもいいのに。

明け方に、「くうつ！」という声で目が醒めた。

「なに？」

慌てて起きる。

「足、攣った」

一生懸命足の筋を伸ばしているのを、ただ見てるしかないんだけど。はじめて見る必死の表情がこれって、あんまりじゃない。

「おさまった。起こしてごめん。さ、寝よ寝よ」

肩に手がまわって、同じ布団の中に引き入れられると、抱き枕状態のあたし。

「肩、冷えちゃったな」

ああもう！慣れないったらない。

でも、あつたかくて気持ちいい。

今なら正直に答えてくれそうな気がする。

「ねえ、あたしたちってどうして続いているの？」

瞬間、腕に少し力が入った。

眠りに落ちるところだったのかも知れない。

返事は簡単で、今ひとつ要領を得ないけど。

「気に入ってるから」

それが状態を指すのか、あたし自身を指すのかは判断できない。

しばらく考えている間に、頭上から健やかな寝息が聞こえてきた。

「気に入ってるから」4

少し朝寝坊して、昼からまた現場に行くという山口君と一緒に家を出ることにする。

「疲れるね」

「仕方ない、俺の仕事だし。他の部署に無理言ってるんだから、俺だけ休暇ってわけに行かないでしょ」

作業ジャンパーの下にネクタイ。

洗面所でお化粧してたら、山口君が横に立って「口紅つける前に」なんてキスしていく。

こういうタイミングはかるの、上手いんだよな。

「忙しいんなら、無理に時間とらなくてもいいよ」

そう言うと、山口君は曖昧に笑った。

「話したいことがあるのかと思って」

「そういうわけじゃないんだけど」

本当は、津田君に見せた顔をあたしも見たかっただけ。でも、いいや。満足しちゃった。

昨夜ってやっぱり、甘えてたんだよね。

乗換駅で手を振って、ぶらぶらとウィンドウショッピングしながら、街を歩く。

気がつくあたしは上機嫌で、なんだか優しい気分になっていたりする。

ああそうか、と自分で気がつく。

あたしは山口君に恋をしたいのだな。

成り行きのそのままじゃなくて、彼がどんな人だか理解して好きになりたい。

好きだ嫌いだって言うより先に「そういう関係」になってしまつて、気は合うし居心地も悪くなくて

お互いの都合が合う時だけ、よそ行きの顔して一緒にいるのは楽だ。生の感情は重たいもの、相手が持つていることに気がつかない筈はなかつたのに、それをやりとりするのを億劫がつて、見えにくいものを「無いもの」としていたんだ。

山口君が見せたくないのなら、見えない振りして感じ取れば良いのに。

自分がどうなつていくのか見極めるのなら、それくらいの芸当をしないといけない。

なんせ敵は「あの」山口肇なんだから。

笑いながらこつちの感情だけ引つ掻きまわして煙に巻く、くらいのことではしかねない。（津田君と同等はイヤだ）

あたしがあたしをどうしたいんだか、見てやる。

「簡単なことじゃないの」 1

トラブった現場はその後3週間近くガタガタして、更に竣工まで調整が手こずった挙句に大赤字だったので、疲れないはずなんがなく、山口君はずいぶん痩せた。

ジョークのキレはなくなってきたし、時折イラついた顔で津田君と新人の萩原君を怯えさせたりもした。

ああ、この辺が限界だったんだなと逆に人間らしくも見えたけど。

片付く見通しが立つまでもう一度だけ、山口君のマンションを訪れた。

いつもは男の一人暮らしなのに比較的片付いている彼の部屋に、着終えたシャツが丸めて置いてあったり、ゴミ箱に入りきらなくなつたゴミをビニール袋に入れたまま置いてあったりで、気の毒だった。「少し誰かに仕事を振るとか、一日くらい休暇もらうとか」

そう言うと、軽々と笑って見せるんだけど。

「みんな自分の仕事がないわけじゃないでしょ。それに、ちゃんと分担はしてるから」

上司も後輩もそれなりに協力はしてるし、大プロジェクトなので関わっている人は確かに多くても、施主や建築会社から見ると担当はあくまでも山口君で、それだけでも大きな負担なのだろう。

「嫌にならない？」って話を振っても、「嫌だよ」なんて笑う。

本当は笑えないほど疲れてるのは、すこしこけた頬でわかつちゃうけど。

「紅葉、間に合うかな？」

「まさか、竣工後までは続かないでしょ。もうちょっとだから」

泊まった日から山口君は微妙に口調が柔らかくなっていて、会社の

中でもその口調で喋る。

どうしました？ま、みなさん気がつかれてませんが。

三枝さんと話してるが増えたなと思ったのは、物件が大方らちがあいて、山口君が本調子に戻ってきたと感じた頃だった。

設備施工部にふらふらと寄っていつては三枝さんと話し込んでいる。今まで、どの女の子とも等間隔に距離を置いて「憧れのお兄さん」で居続けた人の行動じゃない。

後輩とランチに行ったとき「山口さんって三枝さんと仲いいですよね」なんて話を振られて、どう答えていいのかよくわからない。

三枝さんにはつきあっている人がいる筈だし、山口君がミエミエのアプローチをかけるなんてありえない。

何か別の目的があるんだろうけど、何も知らないし。

知らないってことが何かこう、胸に詰まったような錯覚をおこす。知りたいってことは、その人が気にかかるってことだな。

「簡単なことじゃないの」2

社内メールでの意思確認はやはり簡単で、「今日は?」「大丈夫」それだけだ。

紅葉が綺麗になるのはあと一週間から二週間つてところかな。

山口君のこけた頬は元に戻りつつあるし、津田君を弄り倒すのも絶好調。

すべて元通り。

「最近、三枝さんと仲いいね」

嫉妬じゃないから、言葉は平坦。

部屋着に着替えた山口君は缶ビールのプルタブを引きながら、やっぱり普通の顔。

「確認したいことがいくつか重なってるだけ。気になる?」

「ん? あたしじゃなくって、女の子たちがそう言ってるの。それに、今設備に何か相談事のある物件を持ってないでしょ」

あ、表情が揺れた。

「何か言えないことしてるの?」

じつと顔を見てしまったので、山口君は小さく溜息をついた。

「しょうがねーな!。ひとつだけ、教えとくわ。三枝さん、来期から正社員になるんだ」

「え? 特例じゃない。なんで山口君が知ってるの? で、仲が良くなることと関係あるの?」

「関係はあるんだけどさ、今日はここまで。まだ、言わないでね」
人事のことなんて、言わないけどね。

合点のいかない顔で見ていたのかも知れない。
頭を抱えられて、いきなりキスがきた。

そのままカウチに押し付けられると、あとはいつもの手順になる。
慣れた指、慣れた息遣い。

「まいったな。まだ緘口令なのに、喋りたくなっちゃって。どうも最近、野口に見透かされてるような気がするんだよな」
見透かしてなんかいないよ。見たいと思ってるだけ。

山口君の肩の線を指でなぞりながら、あたしが知りたいと思うだけで、彼も何か変わるのだろうかと思う。

「簡単なことじゃないの」3

紅葉を見るために鎌倉まで足を運んだ日は、見事な秋晴れの土曜日だった。

一週間程度早かったらしく、まだ燃えるような秋とまではいかなかったけれども、落ち着いた古い町を歩くのは楽しい。

一緒に外に出かけることなんて、そんなにない。

あたしが参加してるフラワーアレンジメントのサークルでも、NFDの講師資格を持つてるあたしは結構な古株で、趣味とは言ってもそれなりに責任があるから、休みを潰すことは多い。

毎日会社で顔をあわせている分、休みの日に埋め合わせなんてこともないし、ひとり暮らしの山口君だって、家の中で寝ているばかりでもないと思う。

友達が多いみたいだもの。

鶴岡八幡宮の大銀杏が再生してきているのを見て喜ぶやら、長谷寺から海を眺めるやらで、山口君ものんびりしてるらしい。

山口君は花や木の名前なんて全然知らなくて、つまらないかなと心配したのだけれど、杞憂だったかな。

小町通をぶらぶらひやかして歩いている時に、男の人ってこういうものは楽しいのかなとちょっと気になった。

「ねえ、興味ないでしょ。山口君の行きたいところはない？」

「野口が楽しそうだから、いい。その顔だけで一緒に居る甲斐がある」

えええーっ！顔色ひとつ変えずにそういうことを言わないで欲しい。

「・・・マジで言ってる？」

「マジ」

そんなダイレクトな。どうした、山口肇。

そのまま顔があげられなくなる。どうした、野口亜佑美。

「これで照れるのか。ヘンなヤツ」

これでって、今までそんなこと言ったことありましたか。ヘンはあっただ。

帰りの電車はクタクタで、駅からタクシー使おうかな、なんて思っていたら「泊まってけば？」と来た。

「着替えとかないし、明日サークルの用事があるもん」

「下着だけなら、コンビ二で売ってるでしょうが。サークルって朝イチからなわけ？」

「うっん。でもやっぱり止めとく」

そう言っで見返したときの反応が、気になった。

あの、もしかしたら、がっかりしてる？

「寂しいの？」

山口君には全然そぐわない言葉が口をついて出た。

虚を衝かれたようにあたしを見た山口君は、多分素の表情だ。

「いや、無理だったらいい。気をつけて帰れよ」

電車の窓から手を振って、空いている座席に腰を降ろした時に、すこしせつなくなった。

無駄な時間ばかりを過ごしていたのだ。

「簡単なことじゃないの」4

何か弱気になるようなことがあったのだろうか。

そう思うと、とても不安になった。

会社ではいつも通りの顔をしているし、服装にも仕事にも変わったところはないのだけれど。

他の女に目移りしたかも知れないとか、明日からはもう部屋に行かないとか、そんなことは常に想定内で、不安につながったりはしなかった。

何か強い感情を持ち寄っていたわけでもないし、関係性を強めようと努力もしていないのだから、ある意味当然なことだと思う。

先日の物件まで、彼が自分で処理しきれない感情を持つとは思っていなかった。

自分の中ですべて消化してしまえる人だと思っていたのだ。
サイボーグじゃあるまいし。

——今週末はその部屋に居たい。

いろいろ考えたら混乱してしまい、山口君の携帯にメールしたのは、木曜日の深夜（日が変わってるから金曜日だ）だった。

週末って、今日じゃない。すぐに返信が来た。

——OK

やっぱり、ひとことの返事なんだけどね。

辛い時に辛いと言わない。

弱いところなんてひとつもないような顔をして、甘えたい時ですら人を喰った言動で。

けれど、もしも山口くんが本当に立っているのも億劫なほど疲れた時、誰かに頼りたくなったとしたら——

あたしが、それを知っていたい。

簡単なことじゃないの。

「感情を見たい」から、あたしの向かっていく方向は決まっていたのだ。

「簡単なことじゃないの」5

「この間から、何か話があるんじゃないの？」

「そういうわけじゃないの」

山口くんの覗き込む視線をかるうじて避ける。

あなたの頭の中を見せてくださいなんて、言えるわけじゃない。言
つたって仕方ない。

ベッドに並んで腰掛けて、耳元に唇を感じるまでは自分の変化に、
さほど注意を払っていなかった。

だって、何も変わっていない。

違うと思ったのは、シャツの内側に手が入ったときのことだ。

「野口、緊張してるの？」

「・・・そうみたい」

馴染んだ腕に何故緊張するのかわからなくて、混乱する。

「したくない？」

「そうなら、はじめから来ない」

じゃ、こうしてどうか。

半分だけ覆いかぶさった状態の山口君の重みを感じながら、軽い深
呼吸を繰り返す。

何がこんなに緊張するんだろう。

「やっぱり何かあるんでしょ？」

声に気遣わしさを感じた時、何かが堰き切れた。

これを表す言葉はないのか。

今更な感情だけがあたしの中に渦を巻く。

山口君が片腕を立てて窺うあたしの顔は、何を浮かべているんだろ
う。

目を閉じることできなくて、あたしを見る山口君から自分の表情を読み取るうとする。

「そんな、はじめての男と寝るような顔しなくたって」

笑いを含んだ声に我に返った。

そんな顔をしているのか。

「何があるの？言つてよ」

気になる？あたしの変化が気になる？

それが本当ならば、言つていい。解放しよう。すっごく今更で、どうしようもなく間抜けだけど。

「山口君とレンアイしたい」

立っていた腕が背中にまわり、力が籠ったあとに、耳元で低い笑い声がした。

ほら笑う。そう思った時に、言葉が加えられた。

「偶然だな。俺もそう思ってた」

それから、笑いを含んだ溜息。

「やっぱり野口には見透かされてるような気がする」

そしてあたしたちは、中学生同士みたいなぎこちないキスをして、顔を見合せて笑った。

「簡単なことじゃないの」6

ん、津田の家にメシ呼ばれて行っただけ。

でさ、津田は家の中でもあんなの。気は利かないし、不器用だし。沢城に「子供が増えて大変だね」って言ったわけよ。事実そう見えてたしね。

そしたら、沢城の答えがね、こっちが恥ずかしいんだけど。

「でも、慧太は私と暁を守ろうとしてくれてる。絶対見捨てたりしない」って、まっすぐに言うの。

津田のこと、すげーって思ったんだよ。

これだけの信頼を寄せられてるって小手先じゃないよなって。仕事での信頼度はイマイチだけどね、あいつは客先で可愛がられてるからいいんだよ。

正直羨ましかったね。

で、俺があんな風に思ってもらいたい相手って考えた時にさ――

どうにかこうにか態勢立て直して、さてどうやって修正しようと思っただころに「なんで続いているの？」と来たもんだ。

何考えてんだよって思いながら、俺自身が考えてなかったし。

本当に今更だよな。

二度と口には出さないからな。

ちゃんと聞いとけ。

「まあ、他にもあるんだけどさ」

あたしは本当に、初恋がなかった小さい女の子みたいにそれを聞いてた。

タイミングが合ったのだと言ってしまえばそれまでの、見逃してしまえるような変化だったかも知れない。

これが三十路の男女かと笑われても、仕方ない。
あたしたちはここから何か始まるんだろう。

「ひとつ、聞いていい？」

「どうぞ」

「妬いてるんじゃないんだけど、三枝さんと仲がいいのはなんで？」
これは聞きたい。あたしが山口君を気にしはじめたことだもの。

山口君は考える顔つきになる。

「それも、きっかけのうちなんだけど」

次の朝礼まで待つてくれっていう謎の答えのまま、質問は保留された。

「あたしの座る場所」 1

月曜日の恒例朝礼で、あっさり謎は解けた。

「新規部署として、営業推進室を設ける。大手設計事務所との連動で、物件開発のみを行う。まずは準備室開設としての辞令を発表する」

専務がもったいぶって名前を読み上げた3人の中のひとりに、山口君がいた。

「準備室期間は引継と同時に新規部署の立ち上げを行うものとする。以上」

三枝さんの名前はまだ出てこないけど、大方の予測はつく。新しい部署が始動したときに、彼女のデスクがそこに行くのだろう。おそらく、山口君の推薦で。

席につくと、山口君の隣で津田君が焦った顔をしていた。

その横には要領を得ない新人・萩原君が座ってるんだけど、先輩。

「山口さんがいなくなったら、相談相手がなくなるじゃないですか！」

「それ、父の言うセリフじゃないから。お父さんまで保護者欲しがってどうすんの」

社内からいなくなるわけじゃなし。

山口君、涼しい顔。

「だから、野口は残すから」

はい？ あたし？

「もう、緘口令解除だからいいの。候補メンバーの中に、野口も入ってたの。俺が反対した」

「なんで？」

津田君と顔を見あわす。

事務として使いにくいなんて理由なら、あたしのプライドが許さない。

「お子様の津田とそれに指導される萩原のフォローは誰がする？」
あ、信用してもらってるんだ。それならいいけど、あたしは保育士か。

あれ？

「メンバー決定段階から、山口君が仕切ってるわけ？」

「新部署立ち上げ内定の時、決定してたのは室長と俺だけだもん」
打ち合わせがやけに多いとは思ってたんだけど、隠しおおせるところが買われたんだろうか。

立ち上げて責任重大じゃない？実績では文句ないだろうけど。
当然のような顔してるし。やっぱりイヤなヤツ。

「あたしの座る場所」2

お正月に律儀に実家に帰った山口君と入れ違いで、姉一家が我が家に訪れる。

「あゆちゃん、結婚しないの？」

余計なお世話。

短大を出て大手の一般事務から専業主婦になった姉は、口を開くとそればかり。

あたしがお姉ちゃんの幸福に口出ししてないんだから、お姉ちゃんもあたしの生活に口を出すな。

母は、あたしが三十歳の誕生日にとんでもないことを言った。

「あゆにはあゆの人生があるからね、結婚ばかりが幸福じゃないわよね」

それも、余計なお世話。

誰がしないって言った。

あたしと山口君の遅ればせながらのやり直し恋愛は、まだ始まったばかりなんだから親や姉になんかとても言えない。

つきあってる人がいるらしいくらいは気がついてるみたいだけど、それについて公言するつもりはない。

横から余計なことを言われると、反発したくなるから。

家族の間って、遠慮がない代わりに配慮もない。

三日の晩に帰ってきた山口君に会いに、四日の朝からいそいそと出掛ける。

明日から、また向かい側の席だつてば。

晴れ着なんか着て見せるほど初心じゃないけど、お正月らしくちょっとだけ華やかにする。

若い時みたいに、腕とか足とか思い切って出せないけど。

山口君の実家は帰郷というほど遠いところではなくて、疲れた顔はしていない。

「酒ばかり飲んでゴロゴロしてたら、身体が鈍った。ちょっと歩く」

表参道をブラブラ歩いて、明治神宮に入るとまだ初詣で賑わっている。

「ちょっとお賽銭はずんで、神様に頼みごととしてこう」

山口君がなにやら熱心に拝んでいる真剣な横顔を見たら、おかしくなった。

「笑うな。できたばかりの部署が役に立たねーってすぐに解散になったら、どうする」

「怖いのか？」

びつくりして顔を見てしまった。

「怖いよ。実験に使われるんだもん。これできるとメンバー厳選したって、設計事務所に上手く売り込めるかどうか勝負だし」

山口君、こんなこと言うんだ。

あたしにこれを言うんだ。

「真剣な顔してるときに、ごめん。今、すっごく嬉しい」

「野口のフォローがないのは、ちょっと寂しいかな。三枝さんに頑張ってもらっけど」

「いつから、三枝さんが候補になったの？」

「俺と津田の間をウロウロし始めた時から。ずっと野口の名前があがっててさ、他の候補探してたの。根性があって、なるべく他の部署と繋ぎやすいヤツ。この業界、女はまだバカにされること多いじゃん。だけど窓口は女同志だから、あんまり他とベタベタしてると困るんだよね」

なるほど、独身女子社員の中では年齢が上位に入っているあたしが

候補にあがる筈だ。

「なんであたしじゃないわけ？」

「開発営業部が困るから。特に津田」
「やっぱり保育士。」

「あたしの座る場所」 3

仕事はじめからすぐに、山口君は引継業務と新規回りにバタバタと忙しくなった。

ひとり抜けるとはいっても人員の補充があるわけではなく、山口君の客先は在籍している人間に割り振られる。

客先によつてのクセなんて、何回かの引継で覚えられるわけではない。出番だよ、あたし。

何年もここに座ってるんだから、トラブルの予兆を見るくらいはできるでしょ。

なるほど、山口君はここを計算してるのか。

あたしと山口君の間は、表面的には何も変わらない。

相変わらず向かい側で社内メールだし、電車は一本ずらしだし、呼び方は「野口」のまま。

それでもやつぱり、ちよつとずつ変わっていることを自覚する。

たとえば風邪気味に見えた日に、眠る前にちゃんと手足を暖めたかなと気になる、そんなことだけ。

そして山口君が平日忙しい分、週末に一緒にいることが増えた。

やけに柔らかい口調になって、横にただ座っているのが甘えたい時間のだとやつと理解もした。

・・・わかりにくい。「疲れた」と口に出せ。

二月に入ると、新規「営業推進室」の辞令が改めて発表された。

三枝さんが正社員になることはすでに告知済みだったが、異例の中途採用にもかかわらず反発は薄かった。

山口君の読みはあたっていたのだ。

他人に「努力」が見える。性別を感じさせないから、女から不必要な嫉妬はないし、男社会の業界で男から軽く見られるリスクも小さ

い。

事務だけをやらせるつもりじゃないってことがわかる。

山口君の真骨頂だな、この人選。ほんっとーにイヤなヤツ。

どれだけ観察して検討したか知ってるのは、あたしだけでも。

新人の萩原君が、次年度の社員教育の資料を揃え始める。

「その資料、津田のデータが残ってれば流用した方がいいよ。津田にチェックしてもらうより確実だから」

山口君の底意地の悪い一言で、津田君以外が大笑いになったけど。

「津田さんが作ったんじゃないんですか？」

膨れた津田君は答えなかった。そろそろ、津田君で遊ぶのを間近で見るのは、おしまい。

「あたしの座る場所」 4

山口君の机の上から、いろいろなものが移動していく。

入社以来席替えの必要がなかったため、山口君の席はずっとあたしの向かい側だった。

夕方になると、山口君は毎日そこに座っていたのだ。

「野口さん、寂しそうじゃない」

次にその席に移る予定の津田君が言う。

「山口さんみたいに、観賞に耐えなくて悪いけど」

「あ、大丈夫。野口の席は俺の向かいに決まってるから」

山口君のしれつと言った言葉は、あんまりにも普通に聞き逃しそうになった。

「え？野口さんも移動じゃないですよね？」

津田君が焦った顔で聞く。

あたしも脳味噌フル回転。

「席だったって、社内じゃないけどな。食卓とかの話」

言い捨てて、澄ました顔で几帳面にデスクに雑巾をかけてる山口君。

あの、頭がやつと追い付きました。

あたし、ここでどんな顔してたらいいんですか。

遅れて追いついた部内の面々が顔を見合わせた後、大騒ぎになる。

ここで言うか。

デスクの引越し作業の最中に。

これは「みんな知ってるのに本人たちだけ知られてないと思ってる」

津田君パターンよりも恥ずかしい。

引出しから白い小さなプレートを出して、あたしの顔を見た山口君

は、いつもの人が悪い顔で笑った。

「俺、もう使わないからやるわ。次は亜佑美が使うんだし」
名前で呼びましたか、今？

プレートは総員会議なんかで胸につける名札で、「開発営業部 山口」と彫つてある。

ますます大騒ぎになる部内の真ん中に名札を握つて固まったままのあたしを残して、山口君は脇机を押しながら移動していった。

知能犯！悪党！あたしの意思確認なんて、まだしてないじゃない！
パニックになりながら、もう一度頭の中で反芻する。
顔が熱い。

あたしの座る場所は、山口君の向かい側。

f i n .

「あたしの座る場所」4（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

キャラクター使いまわして、ごめんなさい。

できましたら感想などいただけると、とても嬉しいです。

そして、お気に召しましたら——また、次回作も読んでやってくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712p/>

あたしの座る場所

2011年4月16日04時02分発行